

氏 名	ぶん とう だい すけ 分 藤 大 翼
学位の種類	博 士 (地域研究)
学位記番号	地 博 第 11 号
学位授与の日付	平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻
学位論文題目	カメルーン南東部、バカ・ピグミーの精霊儀礼と音楽実践における社会的相互行為

論文調査委員 (主 査) 教授 市川 光 雄 教授 小山 直 樹 助教授 木村 大 治

論 文 内 容 の 要 旨

アフリカ熱帯雨林に居住するピグミー系狩猟採集民の社会は、物品の所有および社会的地位の平準化を実現していることから「平等社会」として位置づけられてきた。しかし彼らの社会も、近代化、グローバリゼーションの波のなかで、農耕化、定住化、現金経済の流入等が進行し、急速な社会的変容の過程にある。申請論文で対象とされたカメルーン共和国南東部の狩猟採集民バカの社会も例外ではなく、1960年代から定住化、農耕化が進展しており、文化的側面においても、農耕民社会に由来する仮面儀礼が取り入れられるなど、変容が進んできている。仮面儀礼は、秘密を知るものと知らないものとの間に社会的な分節を作り出し、権力を生み出す装置であると考えられている。バカの社会生活の核心である平等性と抵触するような文化装置が、どのような形に変形され、受容されているのか。申請論文は、彼らの仮面儀礼とそれに伴う音楽実践における社会的相互作用からこの問題を究明し、ポスト狩猟採集社会における文化変容のあり方について考察したものである。

バカ社会では、「ベ」と呼ばれる歌と踊りの集会が頻繁に開かれている。調査集落では、合計26種類に及ぶ「ベ」が観察され、そのいずれかが二晩に一度という高い頻度でおこなわれていた。それらのうちの14種類は、衣装（仮面）をまとった精霊（「モコンディ」）が登場するものであり、精霊結社の成員によって主催されている。結社は男性によって構成され、そこへの加入にあたっては通過儀礼を受けなければならない。一方、女性たちは歌い手として「ベ」に参加し、裏声を交えたポリフォニックな歌声で場を盛り上げる。

申請論文では、バカ社会に広く分布し、もっとも格が高いとされている精霊「ジェンギ」の「ベ」を対象とし、申請者自身がジェンギ結社への加入儀礼を受けた経験と、赤外線ビデオ撮影による行動学的な資料をもとに、人びとの加入儀礼および「ベ」への参加状況や、それらの場における役割遂行について記述・分析をおこなっている。加入儀礼の過程で、新規加入者はジェンギの踊りをサポートする義務について何度も言い含められ、またジェンギの踊りを盛り上げたり、女性に襲いかかろうとするジェンギを食い止める行動などを繰り返し練習させられる。これらの行動を習得したのち、加入者は一人前の結社員として認められることになる。他方、女性には加入儀礼はないものの、積極的に「ベ」に参加し、ジェンギのために力強く歌うことが求められる。このように、加入儀礼は、すべての性・世代の者が「ベ」において担うべき役割を確認し、習得する場となっている。

そのようなプロセスを経て実施される「ベ」に、人びとはどのように参与しているのか。その実態を明らかにするために、申請者は赤外線ビデオカメラを用いて、夜間におこなわれる「ベ」の参加者の行動を詳細に記録した。その結果、性・世代の相違や、結社員であるかないかに応じて、役割行動に明確な違いが生じていることが明らかになった。しかしその一方で、多くの者が役割から逸脱した行動をとっており、役割が的確に遂行されないことによって「ベ」が短時間で終了したり、十分な参加者が集まらなかったために、予定されていた「ベ」が中止されたことさえあった。しかしそういった「非関与」や「不参加」の事例においても、役割を遂行しなかった個人に対してサンクションが与えられたり、「ベ」が不首尾に終わるこ

とで共同体に災厄が及ぶといった言説が生じることはなかった。

儀礼における人びとの言説と実践との間にずれが生じるという事態は、それほど珍しいことではない。しかし、農耕社会の儀礼に関する研究では、そのずれが主題的に論じられることは少なかった。それは、農耕社会における仮面儀礼では、仮面結社を中心とした権力構造のなかで、成員の役割遂行を貫徹させることによって支配-被支配関係を維持し、共同体の秩序化を図るという機能が実現されているからであろう。一方、バカの仮面儀礼では、加入儀礼において役割遂行の重要性は強調されているものの、実際の「ベ」のパフォーマンスにおいては、役割の不履行に対してこれといったサンクションが設けられていない。その結果、共同体の秩序化はおろか、「ベ」の秩序化も十全には実現されていないのである。これは、役割の十全な遂行によって生じる地位の不均衡を、狩猟採集社会の「平等性」に抵触させないための方策だと考えられる。

バカの人びとが、あえてこのような形で農耕社会由来の仮面儀礼を独自に変形し受容している理由について、申請論文では、グレゴリー・ベイトソンの提唱した「ダブル・バインド（二重拘束）」の概念による説明が試みられている。ジェンギの儀礼においては、加入儀礼において教え込まれた「役割を遂行せよ」というメッセージが繰り返し強調されているにもかかわらず、実際の「ベ」の場面においては、参加者は「役割は遂行しなくともよい」というメッセージに相当するような態度をとっている。結果的に、バカの人びとは自ら発したメッセージを自ら受け流すという矛盾した状態を生んでいるのである。しかし、ベイトソンが、ダブル・バインドの状況においては「創造性が促進される」と述べているように、申請者は、バカの人びとは「ベ」を演出し、楽しみを増やすために、このようないっけん矛盾する状態を活用しているのだと結論している。

論文審査の結果の要旨

狩猟採集に依存して生活する人びとが地球上から消え去ろうとしている現在、その生活形態を記録にとどめ、彼らの文化・社会の変容過程を明らかにするという作業は、ポスト狩猟採集社会の将来像を見定めるという意味でも重要な課題となっている。本研究は、カメルーン南東部の熱帯雨林に居住する狩猟採集民バカ・ピグミーの定住化・農耕化にともなう文化変容を、その社会的相互作用の行動学的分析から明らかにする試みである。具体的には、彼らの精霊儀礼結社への加入儀礼と、「ベ」と呼ばれる音楽実践が研究対象となっている。

狩猟採集民がもつ、固定的な社会的枠組みでは捉えきれない融通無碍な社会的態度は、彼らのなかで調査を行なった者の関心を惹きつけてきた。しかし、そうした態度については、民族誌的記載のなかで観察者の印象として記されることはあっても、明確な研究対象として分析されることはなかった。申請論文はこの問題へのアプローチを、二つの独創的な方法によりながら試みた意欲的な研究である。一つは、申請者みずからが加入儀礼を経験し、精霊儀礼をおこなう結社について詳細な参与観察をおこなったことであり、もう一つは、赤外線ビデオを用いることによって、闇の中でおこなわれる音楽実践に参加する個々人の行動を正確に記録し、分析した点である。

まず、秘密結社の参与観察によって、バカの儀礼行為の詳細がはじめて明らかにされたことは、本研究の重要な成果として評価できる。加入儀礼の観察から明らかにされたのは、ファン・ヘネップによって定式化された通過儀礼の枠組みによって記述できるプロセスであった。新規加入者は、そこでみずからの果たすべき役割について何度も教示を受け、また訓練をほどこされる。アフリカの狩猟採集社会については、このように形式が整った儀礼に関する報告がほとんどないことから、この例は農耕民族文化の受容が進んでいることを示すものと思われる。

加入儀礼をうけておこなわれる、いっけんすると農耕民のものと同じような形式を備えた儀礼の実施様態について、申請者は赤外線カメラを利用した詳細な行動観察から意外な事実を明らかにした。所定の儀礼形式に基づいて行なわれているはずの音楽実践「ベ」を行動学的視点から調査すると、そこで課されているはずの役割（たとえば、太鼓を叩くこと、精霊をサポートすることなど）が的確に遂行されないことによって「ベ」が短時間で終了したり、十分な参加者が集まらなかったために盛り上がりを欠いた「ベ」になるといった事態がしばしば観察されたのである。また、「ベ」において圧倒的な迫力を持つ女性のポリフォニーは、これまで参与する女性たちの一致団結のもとにおこなわれていると考えられてきたが、赤外線ビデオによる観察から、実際に歌っている女性はその場にいる女性たちのごく一部であり、また歌っている人の構成も刻々と変化していることが明らかになった。このように、バカは農耕民由来の仮面儀礼を受容しているようにみえるが、そ

の内実は儀礼的な行為が、狩猟採集民的な緩やかな枠組みの行動様式に変形されているのである。この事実は、申請者の行動学的な精緻な観察にもとづいてはじめて明らかにすることができたものであり、新たな手法による発見として評価できる。

狩猟採集民社会は従来、地位の不均衡を固定化させないことによって集団内の社会的安定を保つ「平等社会」であるとされてきた。バカの仮面儀礼のパフォーマンスにおいては、性や世代の相違や、結社成員か否かによって個々人の役割が定められており、その意味では地位の不均衡が生まれる条件が存在する。しかし申請者は、仮面を伴う実際のパフォーマンス（「ベ」）においては、そうした役割が適切に履行されなくても、それに対してとりたててサンクションが設けられていないことを明らかにするとともに、このことによって、役割遂行を通して支配－被支配関係が固定化することが回避されていると指摘している。さらに申請者は、グレゴリー・ベイトソンの提唱した「ダブル・バインド」の概念を援用して、このような役割の不履行に積極的な意味を与えることを試みている。すなわち、バカは、役割に関していっけん相矛盾する二つのメッセージのどちらかに適宜乗り換えることによって、「ベ」に緊張感を与え、その楽しみを増幅させていると考えるのである。この考察は、狩猟採集民の文化・社会の特徴と異文化受容のあり方を理解するうえで、新たな視点を提供するものと考えられる。

このように申請論文は、精緻で具体的な行動観察によって、狩猟採集民社会における相互行為の特徴と、それが近年の文化変容においてどのようにあらわれているかを明確に描き出すことに成功している。よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成16年1月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。